

# 川崎医療短期大学の教育戦略

今 城 吉 成

## Educational Strategies of Kawasaki College of Allied Health Professions

Yoshinari IMAJO

### はじめに

2007年からわが国の大学は「全入時代」に入っているとされています。つまり、大学進学希望者が「ある特定の大学に入りたい」という希望を捨てれば、全員が大学に入学できるという状況になったのです。こうした中で、各大学や短大は生き残りをかけて受験生の獲得に奔走することになりました。本学も、昨年（2009年）の高校訪問回数が380回を上回ったことが示すように、入り口対策には強い関心と努力を払ってきました。今後も文部科学省の指導をにらみながら、入学試験の時期や内容について、区別し学科別に、受験生が受験し易い、また、他学に優先権を与えないようなコンディションを整え、一人でも多くの本学にふさわしい入学生を獲得できるように、関係者の叡智を絞って対応したいと思っています。

さて、上記の対策を精力的に実施しながら一方では、本学の魅力を高める努力も怠れません。学生諸君から、「川崎医療短期大学の各学科と、対応する専門学校とでは、どこが違うのですか」と尋ねられたとき、自信を持って「ここがこう違う」とはっきり答えられるような「内容作り」を進めねばなりません。入学から卒業までの諸費用の総額は、明らかに短期大学のほうが割高につきます。その見返りが、短期大学士の資格というだけでは余りにも責任感に乏しいと判断されても仕方がないといわねばなりません。現実問題として、本学の収入の80%以上は学生の納入金に頼っており、受益者たる「学生とその保護者」が「本学が行う活動の80%以上を教育に集中してくれて当然」と考えるのは決して無理な要求ではないのです。こうした事情を根底に据え、本学の教育戦略について述べてみたいと

思います。

### 1. 本学のミッション（役割、使命）について

本学は、周知のように「人をつくる、体をつくる、深い専門的知識・技能を身につける」を建学の理念として創設されました。多くの大学や短大では、建学の理念が現代の世相から乖離してしまい、新たな解釈の付与を余儀なくされるといった事情がある中で、本学の理念は今日的な意味においてもその輝きをいささかも減じておりません。われわれ教職員は、それぞれが異なった立ち位置から、建学の理念に沿った教育をどのように実践できるかを考えるべきだと思います。そうして、建学の理念が敷いたレールの上に、各学科の魅力あふれるカリキュラム、ディプロマ・ポリシーをいかに構築するのか、もう一度じっくり議論をする機会を持っていただきたく思います。つまり各学科が学生に対して「本学科で学べば、2～3年間でこういう人間になるように教育します、あるいはこういう事ができる人間にしてあげます」という明確な目標を提示するのです。これらのポリシーは、簡潔で要点を突いており、いつのまにか覚えてしまうようなものでなければ活用はおぼつかないと思われますし、こうした過程をないがしろにして「ユニバーサル・アクセス時代」の学生を対象に有効な授業を成立させることは難しいのではないのでしょうか。

### 2. シラバスについて

名古屋大学の授業秘訣集（ティーチング・ティップス）<sup>1)</sup>には、シラバスを作る意義として以下のようなことが挙げてあります。

1. 学生との契約であるから、双方がコースの展開に責任を持つ意識を高める。シラバスのない「学生さん、自由にやってちょうだい」型の授業は、学生の目には教師の無関心の証拠と映る。
2. 学生が、現在自分たちはコースのどこにいて、ど

（平成22年10月15日受理）

川崎医療短期大学 学長

President, Kawasaki College of Allied Health Professions

こに向かっているのかを知ることができ、安心感を持つことができる。

3. 学生の教室外（放課後）の学習活動のガイドになり、それを促す。
4. 課題やその提出締め切りなどを、そのつど周知する手間を省く。
5. シラバスを書く作業を通じて、教師はコースのプランをより具体的なものにすることができ、学生と自分の時間的制約、教材の制約などの観点から、コースにおいてなにを捨て、何を残すか、コースにおいて本質的なものは何かを考えることを促す。

上記の文章から、シラバス作りの方向性が見えてくるとともに、教師の独りよがりや排し「よりよい授業を行うナビゲーション的な内容のもとにしっかり目的地に誘導する」という成果保障も必要だということが分かります。また別の指導書にはさらに具体的に「学生がどのように学んだか、学習成果をアセスメントする必要がある、そのためには授業ごとの到達目標を明確にし、学生への適切なフィードバックが求められる」と書かれており<sup>2)</sup>、従来の「これこれのことを教えた」というやりっぱなし方式ではなく、授業ごとに明確な到達目標を明示し「学生がその授業で実質的になにを身につけたのか」の評価も含めるのが理想的であるとしているのです。

さらに先日（2010年8月5日）行われた諸星裕教授のGPAに関する講演では、桜美林大学においては、シラバスのチェックは学科長の職責として規定しており、「各教員は一つひとつの科目内容とその教育に責任を持ち、学科長は管理下にある学科が提供するすべての科目の相関関係と整合性などに責任を持つ」ということを実践しているといわれておりました。これは日本の大学にとっては極めて珍しいことですが、アメリカの大学ではごく普通に行われていることのようにです。

### 3. 講義について

カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集の日本語版の前書きによれば、日本では「米国の大学はやる気と能力のある学生のみを対象として教育している」という誤解があるが、「おちこぼれをいかに拾うかということに努力を惜しまないのが米国の大学である」と書かれています<sup>3)</sup>。そしてそのアイデア集には、世界有数の有名大学であるカリフォルニア大学で、教授たちが良い講義を行うために、いかに様々な努力を繰り返しているかがつぶさに書かれて

います。そこでは、講義は十分時間をかけて準備され、講義ノートは新しい情報を盛り込んだものに頻回に書き換えられ、場合によっては平板な講義をメリハリのある講義にするために、「宴会の司会者の集まり」に加入して演技のレッスンを受れたり、詩や劇の朗読グループに加入したりする努力もされているようです。これを読むと私の場合、いかに安易に講義を組み立て実施しているか、本当に恥ずかしくなります。

重要だと思われた点をいくつかピックアップすると、1. 講義の焦点をいくつかの主要ポイントにしぼり、例外的であったり、複雑すぎたり、あまり細部にわたる不要なものを省略する。2. 主要なポイントは言い方を変えて数回説明する。3. 困難な概念は説明を始める前にその難しさを伝えておく。4. この講義で何を学ぶか、そしてそれは何のためかを学生たちに理解させてから講義を開始する。5. 何を話すつもりかを彼らに話し、実際に話す、そして、なにを話したかを彼らに話す。6. 話すスピードや声のトーンを変えることや、声のピッチや抑揚を変えることを学ぶ。7. いかにしてレポートを書くか、あるいは小論文の課題をこなすかについて「ミニ講義」を行う。8. どうやって本を読むか、本当に知らない学生がいる。教員にとって実に易しい事のように思えることも、学生には易しくないことがある。新入生は、往々にして書物に対して直接的にアプローチするようで、最初から最後まで、文章の一つひとつを、また段落の一つひとつを相手にする傾向がある。そのため、さまざまな種類の書物をいかに読むか、書物の目次や索引をいかに利用し、各章の最初と最後の部分からいかに内容を掏り取るか、主要なポイントをいかに掴み取るか、いかにノートするか、そして、その本が読むに値するかどうかをいかにして判断するか、などについてのミニ講義を行っている。9. 授業内容を学生が理解しているかどうかを知るために以下の試みを行う。a. 講義の終わりに minute paper を実施する（今日学んだ事柄のうち、なにが最も重要だと思いますか？ 今日の講義の終わりに当たり、真っ先にうかんだ疑問は何ですか？ などに関して書いてもらう）。b. 学期の間に何度かインデックス・カードを配り、コースに関する学生の意見・感想を求める。c. 講義の最後の10分を質問を受ける時間にとっておく。d. 頻繁に小テストを行う。

本学でも、FD・SD委員会のご努力で2002年から、学生による授業評価、昨年からは教師自身による授業

評価が実施されています。評価慣れしていない学生による授業評価が絶対的な価値を持つとは思いませんが、示唆に富む結果も含まれているはずですが、まず、この授業評価を各自がどのように利用するかを考えると、われわれが「授業料の対価として学生に提供する商品としての講義」の価値をいかに高めるのかについて、日々省察・検討し、改良を加えていただきたいと願っています。

#### 4. 成績評価について

機能的なシラバスには、成績の評価方法を含める必要があります。成績の評価は以前から教員による絶対評価が行われており、これからもこの流れは変わらないと思います。しかし絶対評価であるからといって、極端に成績優秀者が多かったり、少なかったりすれば、授業内容か成績評価に問題があるといわれる可能性があります。授業内容に問題がある場合は論外ですが、厳しい評価に対しては、学生から「自分の成績はなぜこの評価なのか、その評価基準は何か」というクレームや問い合わせが寄せられ、それにしっかり答えるための準備をしておくことが求められるでしょう。こうしたことを回避するためにもあらかじめシラバスに、分かりやすく具体的に評価の根拠や基準を記載しておきたいものです。

現在本学では、2011年度から試行的に、2012年度からの本格導入を目標に、GPA (Grade Point Average) に関する検討を始めております。GPA そのものは大変シンプルな成績評価システムですが、これを学生に対する注意や警告、退学勧告にまで用いるとなると、その元になる各教科の成績評価が大変重要な意味を持つこととなります。したがって、GPA をうまく運用するには、前段階のシラバスの完備と講義内容の充実が避けて通れないステップになります。

#### 5. 図書館の位置づけ

本学の図書館は蔵書も多く、短期大学の図書館としては立派な部類に入ると考えられます。しかし、学生の利用頻度や図書の貸し出し回数は決して多いわけではなく、図書館が十分機能しているとはいえない状況にあるのではないのでしょうか。諸星裕教授の『消える大学・残る大学』には、「図書館は、教育活動を補助する重要な教育資源で、本来は教員が行っている授業に役立つ本がそこに所蔵されており、授業を履修している学生は絶えずそれらの本を読んでいなくてはならない

はず」と書かれています。また、「教員が選ぶ本は、学生が読むべきだと思って選んでいるはずだが、なぜ学生諸君は読まないのか」の問いかけに対して、「選書の基準がしっかりできていない。自分がこの大学で教授をやっているからには、この本とこの本は本学の図書館で所蔵すべきだ、という程度の基準、つまり学者ギルドの発想がまだある。そして教員がその本を学生に読ませるといって教育をしていない。もともと、日本の学生は図書館の利用が諸外国の大学生に比べて極めて低いことは各種の調査で分かっており、実はそれは図書館のせいではなく、教員がいけない」と答えています<sup>4)</sup>。

私自身は、比較的良好に図書館を利用するほうだと思っていますが、皆さんはいかがでしょう。ぜひ図書館に関心を持っていただきたいと思います。また現在、各学科に割り当てられている図書費をノルマ達成的に使うのではなく、自分の授業と関連付けたり、学生の立場や視点に立って選書した結果で使う、といった方向に持っていければありがたいと考えています。

#### 6. おわりに

学長として本学の教育の方向性について書いてみました。

自分自身も授業を担当する身として、「お前はどうか」と問われれば内心忸怩たる思いがあります。しかし、文科省が2007年度の数字として「私立大学の入学者で、一般入試の入学者は19.6%であった」と発表したように、時代はわれわれの認識を超えて、どんどん先に進んでおります。本学もこのまま何の対策も施さず、流れに身をゆだねていたら、急流の中の泡のごとく弾けてしまうかも知れません。諸星教授も先に紹介した講演で、学生募集を停止した大学への聞き取り調査で、多くの大学の学長が「教職員が5年前に現状を理解してくれておれば、募集停止に至らなかっただろう」と述べていることを紹介しておられました。本学がそうだという訳では決してありませんが、「他山の石」として注意するに越したことはないでしょう。

われわれの目指す理想の短期大学への道程は決して平坦ではないでしょう。しかし目標を定めて皆さんとともに努力すれば、決して達成不可能な到達点ではありません。生存競争を生き抜くために、到達点の微調整にも配慮しながら目標に向かって邁進したと思います。

「入りたい短期大学」から「入れる短期大学」にず

り落ちることがないように、これからもしっかり頑張ろうではありませんか。

## 文 献

- 1) 池田輝政, 戸田山和久, 近田政博, 中井俊樹: 成長するティップス先生, 東京: 玉川大学出版部, p. 60, 2003.
- 2) 土持・ゲーリー・法一: ラーニング・ポートフォリオー学習改善の秘訣ー, 東京: 東信堂, p. 63, 2009.
- 3) 香取草之助監訳: 授業をどうするーカリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集ー, 神奈川: 東海大学出版会, 2003.
- 4) 諸星 裕: 消える大学・残る大学ー全入時代の生き残り戦略ー, 東京: 集英社, p. 178, 2009.